

2020.4.11①

「自由に生きる力」が育つと子どもの主体性が伸びる。
主体性が伸びると、子どもは自立し、保育者もストレスが軽減
と、テレビで紹介された本から抜粋しました。

決めるのは子ども。

大人は「決めるための材料」を伝えるだけ

無力な赤ちゃん時代を知っているお母さん、お父さんにとって、子どもはいつまで経っても「なにもできない子」に見えてしまいがちです。2歳になっても、3歳になっても、いよいよ4歳になったって、どこか赤ちゃん扱い。ついつい手と口が出てしまいます。だけれども、その子に関することは、その子自身に決める権利があります。私たち大人の仕事は、「決めるための材料」を与えることだけ、なのです。

もちろん、はじめから「決める」はちよつとむずかしい。

だからまずは、「選ぶ」からスタートします。

うちでは1歳児になると、「選ぶ練習」をはじめます。

たとえば、お昼ごはんのときにおしほりをふたつ出して「どっちにする？」と聞く。両方とも同じおしほりですけど、「うーん、こっちにする」「そっち！」と選んでもらうので

す。そのほかにも、「牛乳とお茶、どっちを飲む？」「お味噌汁、どれくらいよそう？」など、できるだけ自分で決めてもらいます。

また、散歩に行くか行かないかも、子どもが決めます。「今日は気分が乗らないから部屋で遊びたい」と決めた子は、お留守番でかまいません。

おうちでは、まず靴下やシャツなど身につけるものを選んでもらってはとうでしょう。ちぐはぐな組み合わせになってもご愛敬。子どもらしくてかわいいですよ。

こうして「選ぶ経験」を積み重ねていくと、だんだん、「自分で決める」ができるようになります。

そして、子どもが決めたことには口出し無用です。

たとえば保育園に着ていく服に、ヒラヒラのフリルがついたよそゆきのかわいい服を選んだ女の子がいます。当然シンプルな服のほうが遊びやすいし、親としても保育園に着るのはもったいない。でも、「それを脱いでこっちの服を着なさい」なんて命令したら、子どもは自分の決定を否定されたようで、おもしろくないですよ。

ただし、「ハイハイ」と言うことをただ聞くわけではありません。子どもは、決めるための十分な知識を持っているとは言えないからです。

ですからこういう場合は、「決めるうえで必要な材料」を伝えてあげるので。
 「マリちゃんが大好きなお洋服が汚れちゃうかもしれないけれど、ほんとうにいいの？」
 「それでもいいもん」と言うのなら、「えーッ、もったいないなあ」と思いつつも、黙ってその決断を受け入れてあげましょう。
 結果的に、「やっぱりこれ、遊びづらい！」「汚したくない！」と気づいて服を決め直すのも、またよし。軌道修正の、いい経験になりますから。

🌀 ヒントを出して、あとは「自分で考えてね」

5歳児のクラスでクリスマス会の歌を練習しているとき、ミズキちゃんがふざけて指揮を振っている私の真似をしました。みんなもそれを見て笑ってバラバラに……。

こういうとき、私はいつもこう尋ねます。

「ねえ、ミズキちゃん。いま、どうするのがいいと思う？ 自分で考えてくれないかな？」

もちろんそれだけでは不親切。ですからちゃんと、

「指揮ってさ、みんなが見て、リズムや速さ、強弱を揃えるためにあるんだよね。それなのに、指揮者が二人いたらみんながわからなくなっちゃうね」

と説明を加えてね。そのヒントを耳にし、どうするのがいいのか自分で考えてもらおうわけです。ミズキちゃんは首をかしげて少し考えて、「歌う」と決めてくれました。

自由に生きるためには、考える力が不可欠です。

なーんにも考えないのも、言われたことを鵜呑みにするのも、自由に生きるための壁となります。

ですから私は、子どもたちに「自分で考えてね」って年中言っているのです。

子どもって、大人がやめてほしいことばかりします。

はしゃいで、おちやらけて、かわいいんですけどね。

でも、このとき一方的に「やめなさい！」で押さえつけると、考える機会を奪ってしまいます。「ママがやめろって言うからやめた」になっちゃう。

だから、自分で考えて、どうするか自分で決めてもらうのです。

同じように、先周りしすぎるのも子どもの考える機会を奪ってしまう要因になります。

「ほらほら、危ないでしょー！」「ほらほら、次はこうしなさい！」

……ね、覚えがありませんか？

喉まで言葉が出かかって、ぐっと飲み込んで、静かに見守って。

子どもがつまずいたら、そのときはじめて気づいたような顔をして「こうしたらいいんじゃないかな？」「お手伝いしましょうか？」と提案すればいいのです。